こくご

一

K160.8
1
1

D6
323

と

国立教育研究所
附属
教育図書館蔵書

一

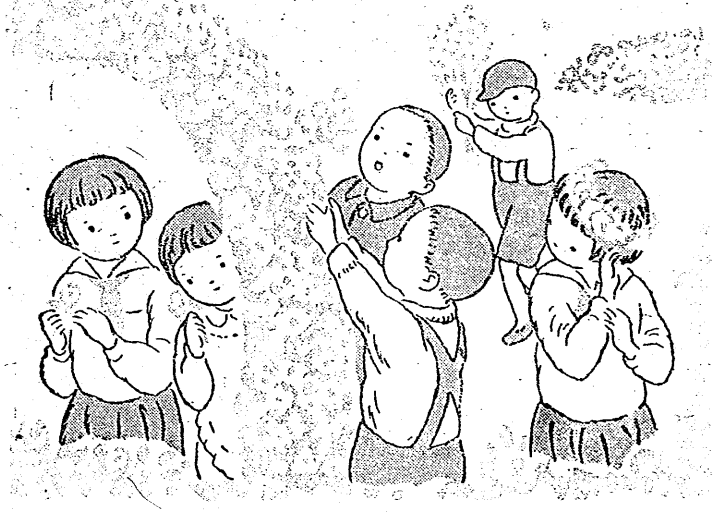
もくろく

一　みんな　いい　こ……四
二　なのはな……六
三　むすんで　ひらいて……八
四　たまいれ……九
五　かくれんぼ……十二
六　もちもの……十四
七　よみかき……十五
八　あさの　ごくばん……十七
九　ゆうやけ　こやけ……十八
十　ゆうぎ……二十一
十一　あいさつ……二十四
十二　人の　かお……二十七
十三　手と　足……二十九
十四　ひとつの　ことばから……三十一
十五　なって　みたい　もの……三十四
十六　だんだん　くわしく　なる……三十七
十七　山の　つつじ……四十
十八　お月さんの　くに……四十三

一　みんな　いい　こ

おはなを　かざる、

みんな　いい　こ。

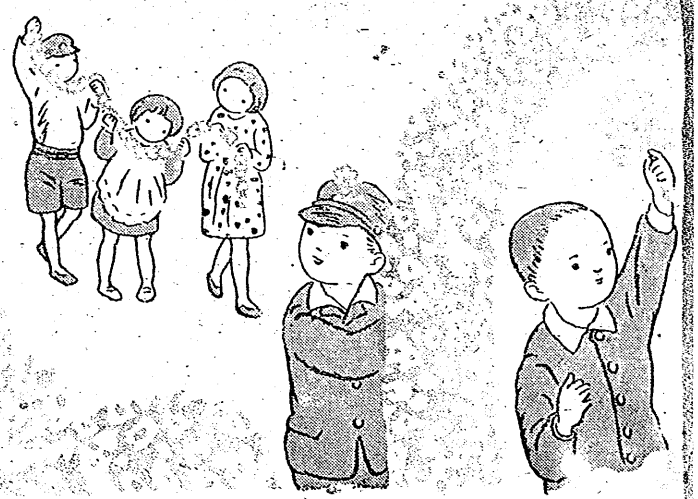


きれいな　ことば、

みんな　いい　こ。

なかよし　こよし、

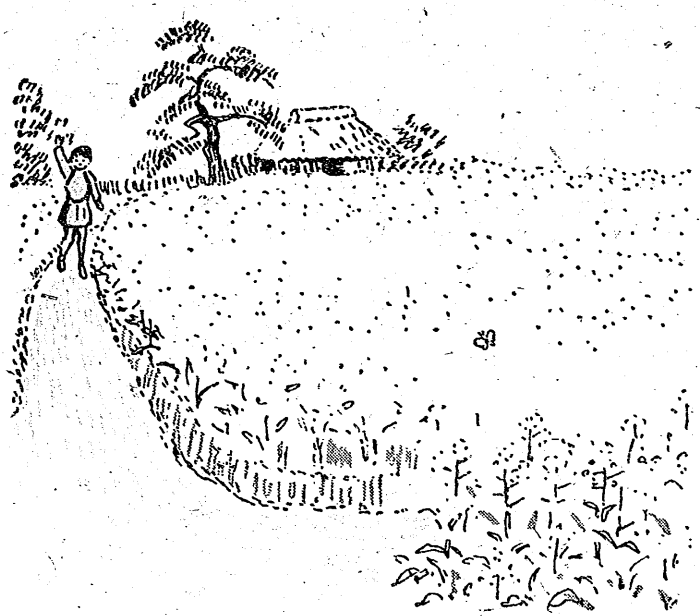
みんな　いい　こ。

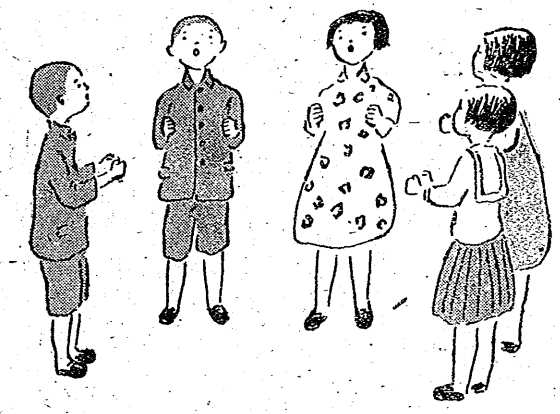


二　なのはな

なのはな、
なのはな、
まつの　き。
なのはな、
なのはな、
しろい　くも。

なのはな、
「おはよう。」
「おはよう。」
なのはな、
なのはな、
なのはな。



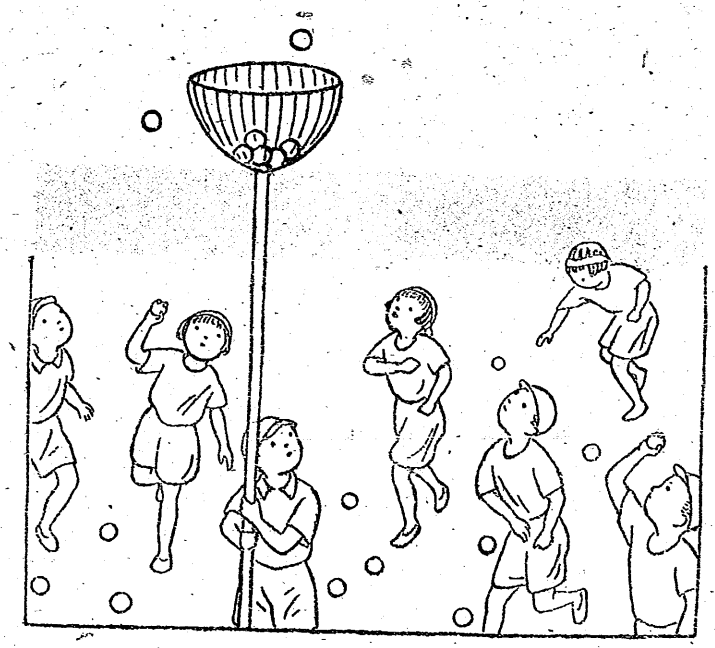


三　むすんで　ひらいて

むすんで、
ひらいて、
てを　うって、
むすんで、
また　ひらいて、
てを　うって、
その　てを　うえに。

四　たまいれ

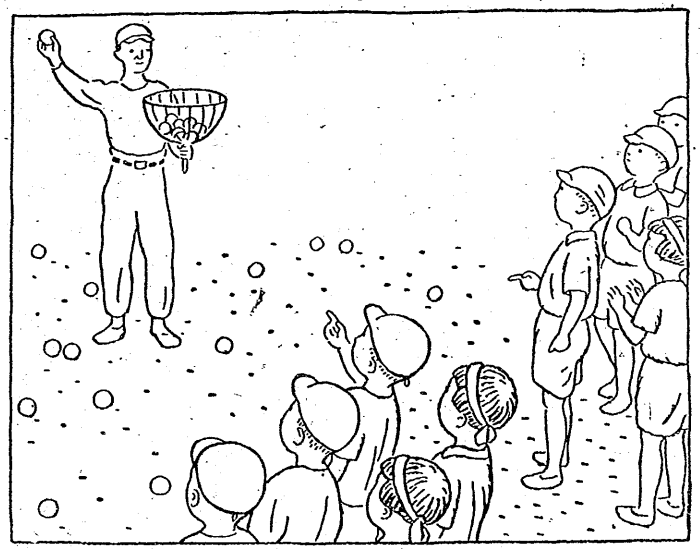
しろい　たま、
あかい　たま、
しろい　たま。
あかい　たま、
あかい　たま、
しろい　たま。
はいった。



「はいった。
しろい　たま。
「はいった。
「はいった。
あかい　たま。

○

「かごに　はいった　たま
を　かぞえましょう
さきに、しろい　たまを



かぞえましょう。
「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、な
なつ、やっつ、ここのつ、とお、十一、十二、十三、十
四。
「こんどは、あかい　たまを　かぞえましょう。
「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、な
なつ、やっつ、ここのつ、とお、十一、十二、十三、十
四。
「おや、どちらも　おなじでしたね。
もう　一ど　やりましょう。

五　かくれんぼ

かくれんぼ　する　もの、
よっといで。

じゃんけんぽんよ、
あいこでしょ。

もう　いいかい。

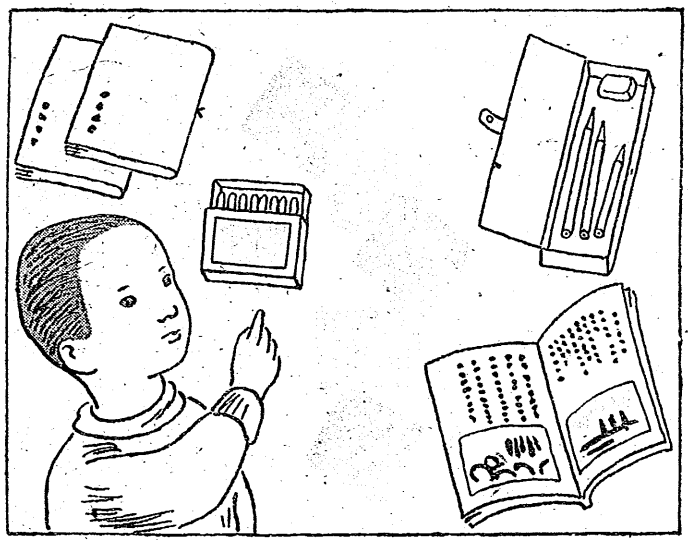
まあだだよ。

もう　いいかい。

まあだだよ。

もう　いいかい。

もう　いいよ。

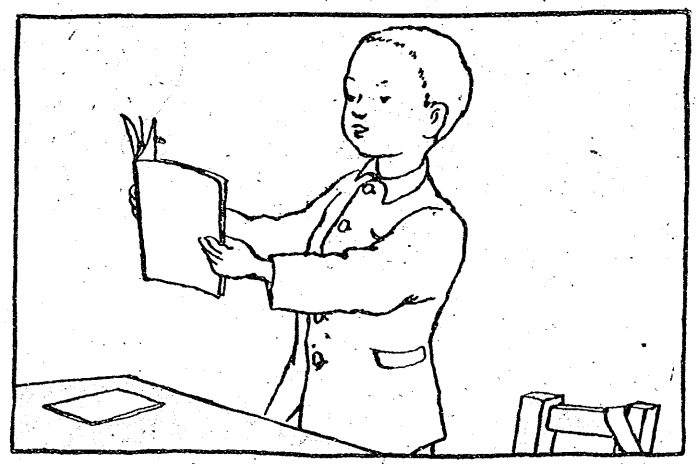


六　もちもの

わたくしの　もちもの。
ほん　一さつ、
ちょうめん　二さつ、
いろがみ、五まい、
くれよん　ひとはこ、
ふでいれ　ひとつ、
えんぴつ　三ぼん、
けしごむ　ひとつ。

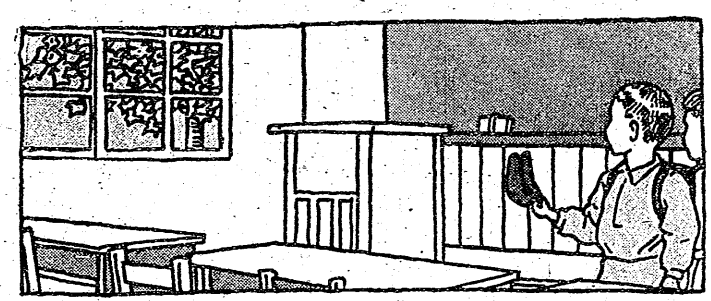
七　よみかき

じを　よむ　ときには、
くちを　つかいます。
めも　つかいます。
いきも　つかいます。
こころも　つかいます。



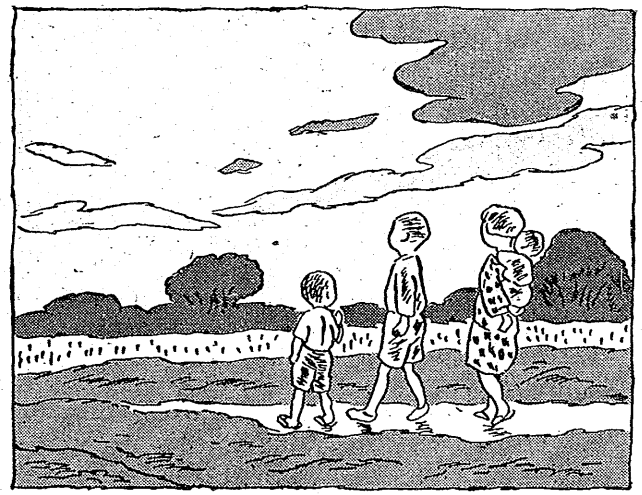
じを　かく　ときには、
てを　つかいます。
えんぴつも　つかいます。
かみも　つかいます。

まだ　あります。
なんでしょう。



八　あさの　こくばん

あさの　こくばん　きれいだな。
まどの　きの　はが　うごいてる。
きょうは、
どんな　えが　かかれるでしょう。
どんな　じが　かかれるでしょう。
だれが　かくでしょう。
だれが　よむでしょう。
せみが　どこかで　なきだした。



九　ゆうやけ　こやけ

ゆうやけ　こやけ。
あした
てんきに　なあれ。

○

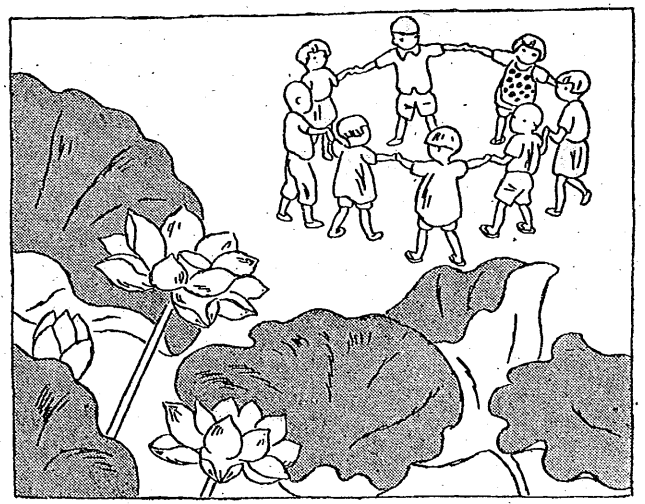
うさぎ、うさぎ、
なに　みて　はねる。

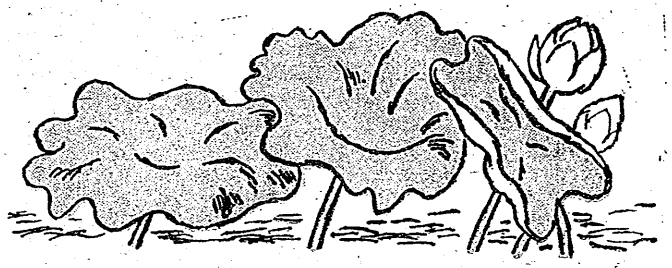
十五や　おつきさま

みて　はねる。

○

ひらいた、ひらいた。
なんの　はな　ひらいた。
れんげの　はな　ひらいた。
ひらいたと　おもったら、
みる　まに　つぼんだ。

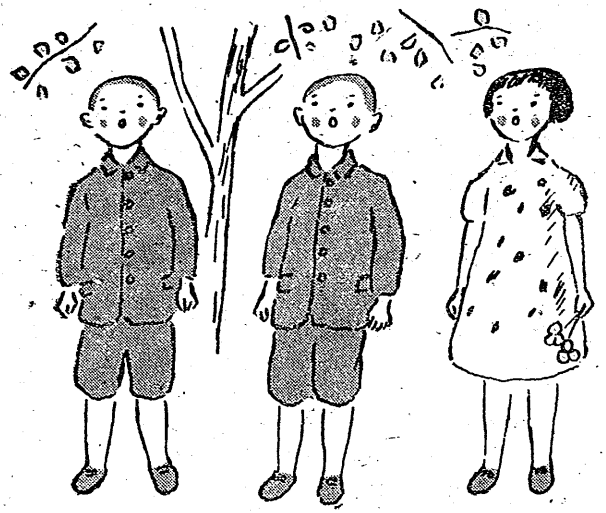




つぼんだ、つぼんだ。
なんの　はな　つぼんだ。
れんげの　はな　つぼんだ。
つぼんだと　おもったら、
みる　まに　ひらいた。

十　ゆうぎ

「おてて　つないで、
のみちを　いけば、
みんな　かわいい
ことりに　なって、
うたを　うたえば、
くつが　なる。」



○

いま、「おてて　つないで」の　うたを　うたいました。
それから、この　うたの　ゆうぎを、みんなが　かって
に　かんがえて　おどりました。

わたくしは、「おてて　つな
いで」の　ところで、おともだ
ちと　てを　つなぎました。
「のみちを　いけば」の　とこ
ろは、げんき　よく　あるき

ました。
「みんな　かわいい　ことりに　なって」の　ところは　こ
まりました。そこで、りょうてを　はねのように　うごか
しました。
「うたを・うたえば」では、くちに　てを　あてて、らっぱ
のように　しました。
「くつが　なる」では、あしぶ
みを　しました。
「はれた　おそらに　くつが
なる」では、てを　うえに　さ

しあげました。

二ばんの「ほねて　おどれ」の　ところは、ぴょん　ぴょん　とびました。ここが一ばん　おもしろかったと　おもいます。

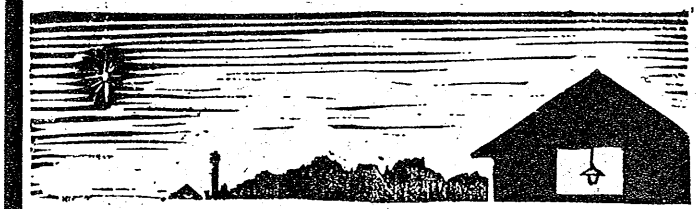
十一　あいさつ

「こんにちは。」

「こんにちは。」

たねまき　する　人、
いえを　たてる　人、
さかなを　とる　人、
きしゃを　はしらせる　人。

「こんばんは。」
「こんばんは。」
一ばんぼし　みつけた。

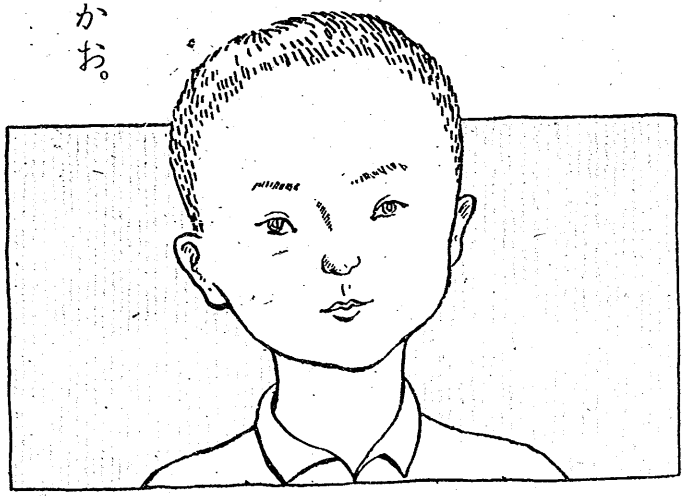


ニばんぼし　みつけた。
こもりうたが　きこえます。

「おやすみなさい。
「おやすみなさい。
ことりも　ねむりました。
らじおも　ねむりました。
くさも　きも　ねむりました。

十二　人の　かお

目は　ふたつ、
みみも　ふたつ。
口は　ひとつ、
はなも　ひとつ。
だれも　だれも
おなじ　かお。
だれも　だれも　ちがった　かお。



ひとつの　かおが、
わらったり、
ないたり、
おこったり、
よろこんだり、
かんがえたり、
いろいろに　かわります。

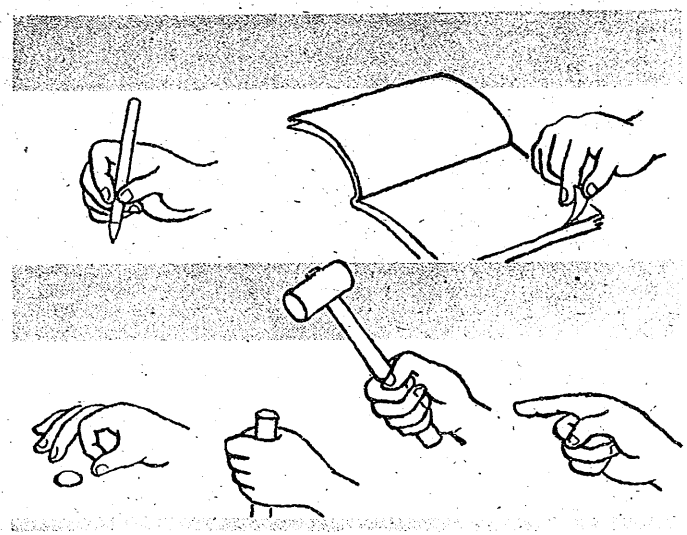
○

「げき、あなたは、その　目で　なにを　みましたか。」
「きのう、その　みみで　なにを　ききましたか。」

十三　手と　足

手は　二ほん、
みぎ　ひだり。
足も　二ほん、
ひだり　みぎ。

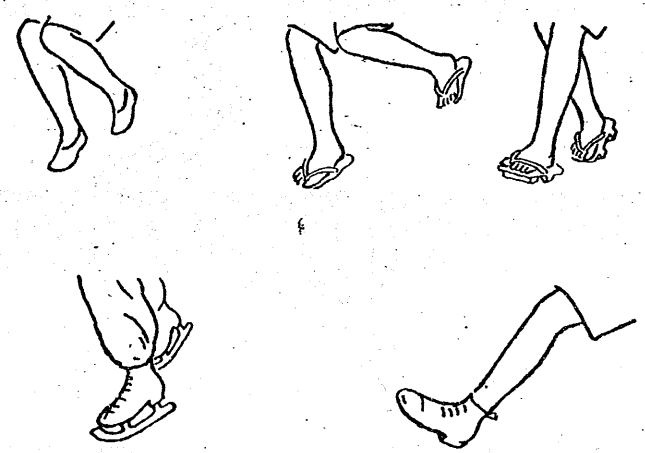
手と　なかの　いい　こと
とば。



もつ、にぎる、なげる。
また　あります。

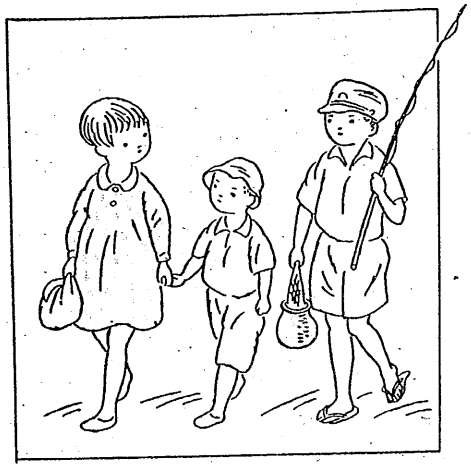
足と　なかの　いい　こ
とば。
たつ、あるく、はしる。
ほかに　ありませんか。

この　手で、なにを　も
ったでしょう。



この　手で、なにを　もつ
でしょう。

この　足で、どこへ　いっ
たでしょう。
この　足で、どこへ　いく
でしょう。



十四　ひとつの　ことばから

お日さまと　いう　ひとつの　ことばから、

おもいだした　ことばを、つぎつぎと　かいて　みました。

ただおさんの　かいた　ことば。

お日さま――おつきさま――おほしさま――
――くも――かぜ――あめ――ゆき――きた
――みなみ――にし――ひがし――

みちこさんの　かいた　ことば。

お日さま――おかあさん――かがみ――
くし――手ぬぐい――ふきん――おへや――
――なか――そと――

まことさんの　かいた　ことば。

お日さま――にじ――あか――あお――
きいろ――まる――四かく――三かく――

よしこさんの　かいた　ことば

お日さま――はな――ことり――とぶ――
なく――とまる――かくれる――

十五　なって　みたい　もの

「なにでも　なる　ことが　できるなら、ただおさんは、なにに　なって　みたいと　おもいますか。」

「かぜに　なります。」

「なぜ、かぜに　なりたいと　おもいますか。」

「かぜに　なって、どこでも　どんどん　ふきまわって　みたいのです。」

「みちこさんは　なにに　なりますか。」

「わたくしは　はなに　なります。」

「その　わけは。」

「きれいな　はなに　なって、おへやを　かざりたいからです。」

「まことさんは。」

「うみに　なります。」

「どうして。」

「うみに なって、せかいじゅうの おふねを うかべた
いからです。」

「よしこさんは。」
「ことりに なります。」
「それは なぜですか。」
「たかい 木に とまって、
うたを うたいたいから
です。」

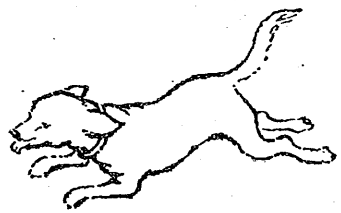
十六　だんだん くわしく なる

かぜが ふきます。
かぜが、そよそよと ふきます。
あさかぜが、そよそよと のはらを ふき
ます。

川が ながれて います。
川が、さらさらと ながれて います。
ちいさな 川が、うちの まえを さらさ

らと　ながれて　います。

いぬが　はしって　きます。
しろい　いぬが　はしって　きます。
しろい　こいぬが、むこうから
ころげるように　はしって　きます。



あさがおの　はなが　さきました。
あさがおの　はなが　いつつ　さきました。
うすももいろの　あさがおの　はなが、いつつ　かきねに　さきました。

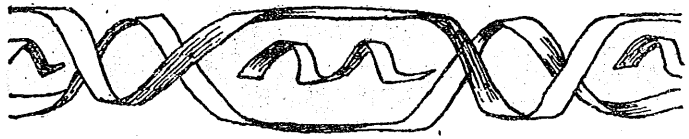
ゆめを　みました。
ゆうべ、おもしろい　ゆめを　みました。
ゆうべ、おとうさんと　きしゃに　のって、お月さんの
ところへ　いった　ゆめを　みました。

十七　山の　つつじ

山の　つつじが　さいた。
まっかな　つつじが　いっぱい。
かっこうが　ないてる。
「かっこう」。
「かっこう」。
つつじから　ないてる。
「かっこう」。
「かっこう」。

○

ほたる。
うちの　なかで　はなした。
でんとうの　したを、
くろく　すうっと　とんだ。
はしらの　かげで、
ぴかり、
ぴかり、
ひかった。



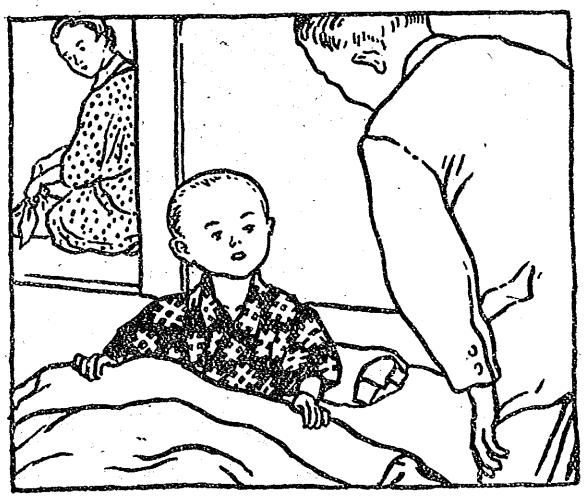
○

せんせいの　目の　なかに、
わたしが　いますよ。
みんなも　うごいて　いますよ。
木も　はえて　いますよ。
せんせいの　目の　なか、
ひろいな。

十八　お月さんの　くに

（二）

よなかに　目を　あけると、
おとうさんが　そばに　たって　いました。
「さあ、お月さんの　くにへ　いくんだよ。いそいで　でかけよう。」



「おかあさんは。」

と　ききますと、どこかで、

「たろうさん、わたし　おるすいよ。ふたりで　いって　いらっしゃい。」

と　いう　こえが　しました。

（二）

ふたりは　いそいで　えきに　いきました。

「お月さんの　くにへ　おいでの　かたは、こちらへ　おならびください。」

かくせいきが　よんで　います。

「げんさが　あるようですね。」

「もちものを　しらべるのだよ。」

こんな　こえが　きこえます。

だんだん　わたくしたちの　ばんが　ちかづきました。

へやの　なかでは、しろい　人たちが、ながい　みみを　ふりふり、もちものを　しらべています。

きものを　きた　おんなの

かたなだの、てっぽうだの、あぶない　ものは　みんな
とりあげられて　しまいました。

（三）

わたくしたちの　ばんが　きました。
かばんを　あけて　なかを　みせますと、
「いいですよ。さあ、あちらの　へやへ　いらっしゃい。」
おんなの　人が　やさしく　いいました。
つぎの　へやで、こしを　かけて　まって　いますと、
おおきな　むしめがねを　もった　おじいさんが、やっぱり　ながい　みみを　ふりふり、わたくしたちを　よびました。

おじいさんは、わたくしを
むしめがねで　のぞいて　みながら　いいました。
「これは　いい　おこさんだ。
げんきな　いい　おこさんだ。」
そう　いって、おとうさんの　もって　いた　四かくなかみに、まるい　おおきな

原本への書き込み多し

はんを　おして　くれました。

（四）

きしゃが　きました。

かくせいきの　こえが　また　ひびきました。

「きしゃは　すいて　います。ごじゅんに　ゆっくり　お"のりください。」

おとうさんは、うしろの　おきゃくさんの　にもつを　もって　あげました。わたくしは、おばあさんの　手を　とって　あげました。

よにんが　むきあって、なかよく　こしを　かけました。

へやには、きれいな　はな"が　かざって　ありました。

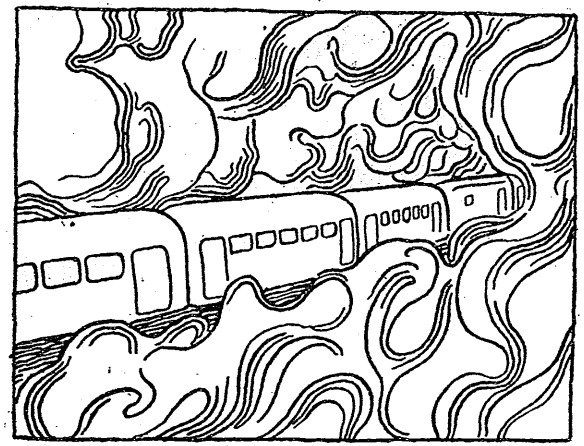
ぴいいっと、しゃしょうさ"んが　ふえを　ふきました。

きしゃは　すぐ　はっしゃ"しました。

（五）

きが　ついて　みると、さ"っきの　人たちも、しゃしょ"うさんたちも、ぼーいさんた"

ちも、みんな　ながい　みみの　ある、あかい　目の　う
さぎさんでした。

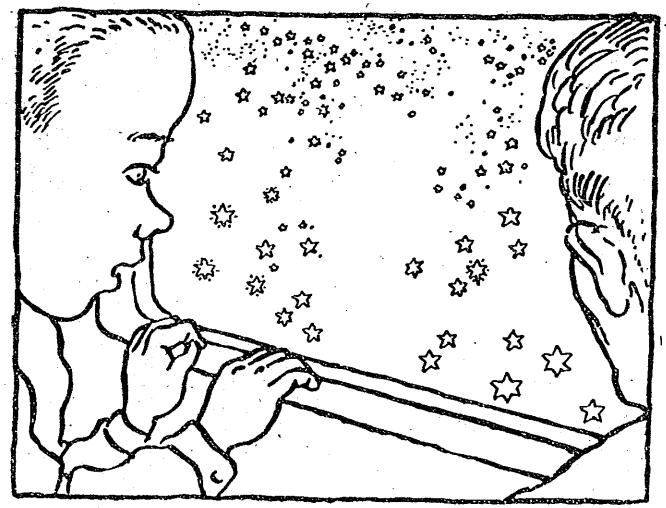


「なんだ、みんな　うさぎさんじゃ　ないか。」
「やっと　きが　ついたの。お月さんの　くにの　きしゃだもの。」
おとうさんも　おきゃくさんも、みんな　わらいました。
しゃしょうさんが　まわって、きて　いいました。

「きしゃは、まもなく　くものの　どんねるに　はいります。みなさん、どうか　ゆっくり　おやすみください。」
「さあ　ねましょう。」
よにんは　もたれあって、ぐうぐうと　ねて　しまいました。

（六）

すずしい　かぜが　ふきこ



んで きたので、目が さめました。

もう あさでした。

おおきな 川が ながれて いました。

「これは なんと いう 川だろう。」

ひとりごとを いうと、となりの おじさんが、

「これは あまの川ですよ。そら、ところどころに、おおきな ほしが ひかって いるでしょう。」

おとうさんも 目を あけました。

「かわらの すなは、みんな ちいさな ほしみたいですね。」

「あれは、みんな だいやもんどですよ。」

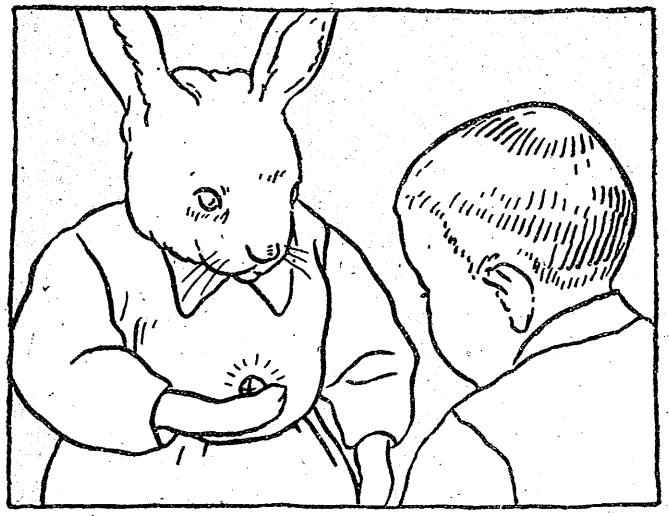
「ひとつ ひろって いって おかあさんの おみやげにしたいな。」

と、わたくしが いった とき、しゃしょうさんが きました。

（七）

「あれは ふしぎな だいやもんどですよ。しんせつな いい 人が ひろうと、だいやもんどですが、いじのわるい けんかずきの 人が ひろうと、ただの いしころに なって しまいます。」

「しょうさんは、ひろった　ことが　ありますか。」
「ええ、いくども　ひろいました。この　お月さんの　くにでは、一ねんに　一ど　たまひろいに　この　かわらに　きます。そうして、たまが　ひろえたら、お月さんの　くにの　なかまに　いれて　もらえます。」
「ふうん。」
「たまが　ひろえなかったら、どう　なりますか。」
おとうさんが　ききました。
「そんな　ときには、はなれぼしに　ある　がっこうに　はいって、べんきょうして　くるのです。そうして、つぎの　としの　たまひろいで、きれいな　たまが　ひろえたら、また　お月さんの　くにへ　いれて　もらえます。」



「あなたは　その　たまを　もって　いますか。」
「ここに　もって　います。」
と　いって、ぽけっとから　うずらの　たまごほど　ある

だいやもんどを　ひとつ　と
りだして、わたくしに　みせ
ました。

（八）

おべんとうを　たべて、ち
ょっと　うとうと　すると、
きしゃは　もう　ついて　い
ました。まどの　ところに、
みおぼえの　ある　かおが、
たくさん　ならんで　いまし

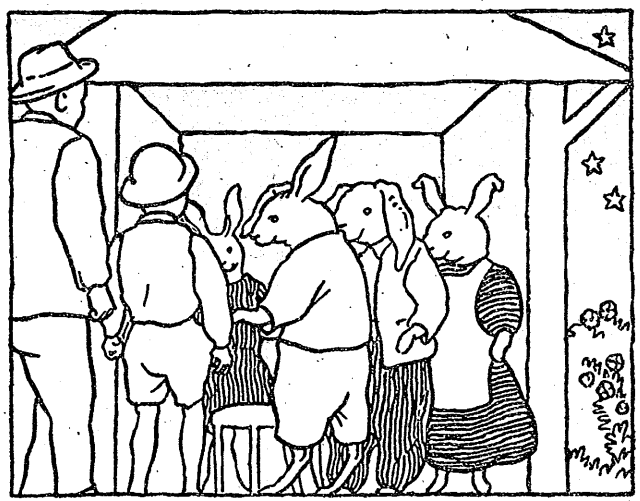
た。

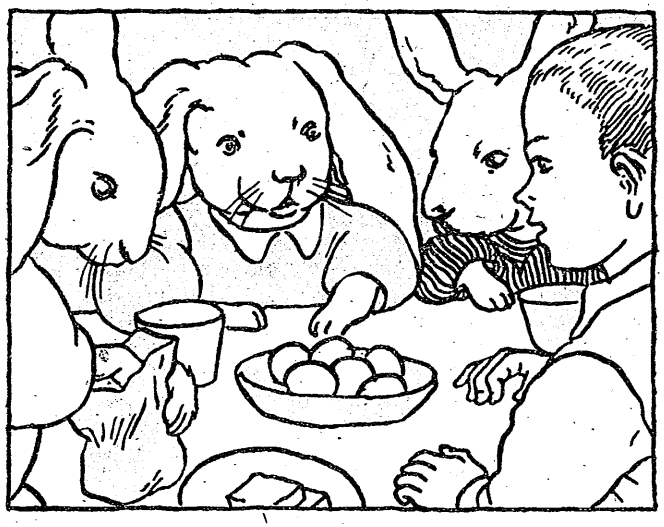
しろちゃん、はねちゃん、ぴょんちゃん、まきげちゃん、
みんな　わたくしの　うちに　いた　きょうだいです。
きしゃから　かけおりて、手を　とりあいました。
「たろうさん、よく　いらっしゃいました。
「みんな　げんきで　うれしいな。」

（九）

「やっぱり　おみみ　なおらないのね。」
わたくしは、かたほう　だらりと　さがった　しろちゃ
んの　みみを　みて　ききました。

「ありがとう　ございます。
あの　とき、たろうさんが
くろいぬを　おって　くだ
さらなかったら、どう　な
って　いたか　わかりませ
ん。あなたは　いのちの
おんじんです。」
と　いって、おれいを　いい
ました。
それから、そろって　しろ





ちゃんの　うちへ　いきました。
だ。
しろちゃんの　うちは、つ
きみそうの　さいて　いる
おはなばたけの　なかに　あ
りました。
おじいさんも、おばあさん
も、きょうだいも、みんな
よろこんで、めいぶつの　お
だんごや、おもちを、ごちそ

うして　くれました。

（十）

「あなたの　おうちに　おいて　いただいた　おかげで、しろちゃんは、げんきな　こに　なりました。ぴょんちゃんも、きれいずきな　いい　こに　なりました。はね」ちゃんも、ものを　はっきり　いう　いい　こに　なり」ました。まきげちゃんも、おともだちと　なかの　いい、やさしい　こに　なりました　おかげさまです。」

と、おじいさんは　おれいを　いいました。

「それでは、みんな、あまの川で　だいやもんどを　ひろって　きたのですね。」

「たろうさん、よく　ごぞんじですね。ここに　いる　も」のは、みんな、たまを　ひろった　なかまですよ。」

おじいさんが　こう　いうと、しろちゃんは　ふくろか」ら　だいやもんどを　とりだして、

「これを　たろうさんに　さしあげます。どうぞ　おかあ」さんの　おみやげに　して　ください。」

と　いいました。

「でも、わたくしが　もったら、ただの　いしころに　な」って　しまわないかしら。」

「どうして、たろうさん。あなたも、おとうさんも、おかあさんも、みんな いい 人ですもの。どなたが おもちに なっても、たまは やっぱり たまですよ。」

と いって、わたくしの 手に たまを おしつけました。

（十一）

よるに なると、おどりが はじまりました。きゅうにあたりが あかるく なりました。でんとうでも ついたのかと おもって みまわすと、山の うえから、おおきな お月さんが でる ところでした。

「おおきな お月さん。」

と いいますと、

「いいえ、あれは たろうさんたちの おくにですよ。それで あんなに おおきいのです。」

と、おじいさんが いいました。

おんがくに つれて、みんなが 手を とって おどりました。おとうさんも、わた

くしも、わの　なかに　はいって、おはなばたけを　おど
りまわりました。わたくしは、「みんな　いい　こ」を、おお
きな　こえで　うたいました。
「ああ、つかれた。ひとやすみ。」
わたくしは、そこに　あった　こしかけに　もたれて、
うとうと　しました。

（十二）

「まあ、たろうさんの　よく　ねて　いること。」
おかあさんの　こえで　目が　さめました。おもわず
ぽけっとを　さぐりました。

「まあ、おかしな　人。どうか
したの。」
「あまの川の　だいやもんど、
おかあさんの　おみやげに
いただいたの。」
「だいやもんど。それなら、あ
なたの　目の　なかに　ふた
つ　ひかって　いますよ。」
と　いって、おかあさんは、
わたくしを　ひざの　うえに
だきあげて　くれました。

な	た	さ	か	あ
に	ち	し	き	い
ぬ	つ	す	く	う
ね	て	せ	け	え
の	と	そ	こ	お

にゃ	ちゃ	しゃ	きゃ
にゅ	ちゅ	しゅ	きゅ
にょ	ちょ	しょ	きょ

ぱ	だ	ざ	が
ぴ	ぢ	じ	ぎ
ぷ	づ	ず	ぐ
ぺ	で	ぜ	げ
ぽ	ど	ぞ	ご

ん	わ	ら	や	ま	は
	を	ろ	よ	も	ほ
	ゑ	れ	え	め	へ
	う	る	ゆ	む	ふ
	お	り	い	み	ひ

ぴゃ	びゃ	ぢゃ	じゃ	ぎゃ	りゃ	みゃ	ひゃ
ぴゅ	びゅ	ぢゅ	じゅ	ぎゅ	りゅ	みゅ	ひゅ
ぴょ	びょ	ぢょ	じょ	ぎょ	りょ	みょ	ひょ

一	五	人	日
(4)	(12)	(25)	(31)
二	六	目	木
(6)	(14)	(27)	(36)
三	七	口	川
(8)	(15)	(27)	(37)
四	八	手	月
(9)	(17)	(29)	(39)
十	九	足	山
(11)	(18)	(29)	(40)

こくご　一　　第一学年前期用
Approved by Ministry of Education
(Date Feb. 20, 1947)

昭和二十二年二月二十日　翻刻印刷
昭和二十二年三月十五日　翻刻發行
〔昭和二十二年二月二十日　文部省檢査濟〕

著作權所有　著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京都王子區堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式會社　代表者　井上源之丞
印刷所　東京都王子區堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式會社
發行所　東京都王子區堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式會社

K160.8
1
2